

「日本の中心を担っている東京の企業・大学を見学し、自分の進路決定の材料にしたい。」これが、今回の東大見学会に私が参加した大きな理由である。二高に入学してから数ヶ月がたち、みんなとも仲良くなってきた中で、私は、みんなが将来、自分の進む道「進路」について具体的な考えをひとりひとりがしっかりと持っていることに驚いた。志望校に入学できて安心しきっていて、文系か理系かの選択をするにも時間がかかった私にとって、夢の達成に向けて日々努力をしているみんなの姿はまさに脅威であった。「早く自分の夢を見つきたい」そう思っていた私はこの東大見学会に参加することにした。東大見学会の大きなイベントは三つあった。一つは一日目 8月5日の午前中の三菱商事・新日鉄住金株式会社へのディレクトフォース・企業訪問研修、二つ目は一日目の午後の、各班ごとの企業大学訪問、三つ目は二日目 8月6日の東京大学本郷キャンパスでのオープンキャンパスであった。

一日目のディレクトフォース・企業訪問研修。私は三菱商事株式会社本社へ行った。会社の中はとても立派で、社員の私たちへの対応も丁寧であった。会議室に通された私たちは、社員の方から、まず「三菱商事とは」ということについて説明を受けた。私は三菱商事は幅広い分野において事業を展開している会社だということを知った。化学、金属、エネルギー、機械から、地球環境、インフラ事業までを手がけている三菱商事。私はそのスケールの大きさに圧倒され、驚いた。次に「仕事について」という題で、三人の社員の方々から説明を受けた。三人の社員の方々はそれぞれ自分の仕事について話を下さった。

その中でも私の特に印象に残っているお話は、金属グループに携わっている方からのお話である。日本は鉱山資源に乏しく、日本のエネルギー自給率はわずか5%である。そのため工業生産をするためには他の国から日本に資源を持ってくる必要がある。そこで三菱はアフリカ、オーストラリアなどの資源の豊富な国々に投資を行っている。その社員の方は、アフリカ大陸南東部に位置する、モザンビークという国に二年半派遣されたそうだ。2000年、三菱商事とオーストラリアの会社、南アフリカ共和国の会社、モザンビーク政府が共同出資をして、モザンビークで大きな工場が操業を開始した。また、三菱商事は、「MOZAL 地域貢献活動」にも力を入れており、年間約2億円の出資を行っている。この活動では主に現地でのインフラ支援、環境・衛生支援や学校の設立などを行っている。三菱が工場を建てて、日本の工業のために尽くすだけでなく、現地の発展のためにも貢献しているということを私は知った。「世界の中の日本を意識するように。」その方は、話をこの言葉で締めくくった。二年半モザンビークという海外で生活をし、客観的に第三者の視点から「日本」を見るということの大切さに気づいたそうだ。私はまだ海外に行ったことがない。ぜひ、今と別の視点から私たちの国「日本」を見るようにしたいと思った。

最後に班毎に別れてのディスカッション。最初のテーマは「日本の常識、世界のジョーシキ」同じ班の人たちと、自身がこれまでの経験で知っている、日本と海外との文化・価値観・常識の違いについて話し合った。私たちの班に来て下さった、講師の方は海外に13年間派遣された経験をお持ちの方だった。その方は私たち、日本人はチームワークが強いということをおっしゃった。日本人は古来、農耕民族であった。そのため共同ワークが得意という強みを日本人は持っているのだそうだ。また、その方は、私たち、グローバル化の中でも日本の文化について勉強し、理解することが大切だということをおっしゃった。海外に行ってから「自分は日本について、よく知らなかった。」ということに気づくのでは遅い。世界の言語・文化について知ることが大事ではあるが、自分の国「日本」について理解することも大事なのである。次のテーマは「高校時代に培うチカラ」高校時代に身につけておくべきものについて話し合った。講師の方からは、「失敗を恐れない気持ちを持つこと。」「好きなことをもつこと。」「自分と違う他のものに触れること。」という意見が出された。私はこれまで、失敗してしまうのが怖いという気持ちや面倒だという気持ちにどうしても打ち勝つことができず、「リーダー」として活躍したことがなかった。今回、講師の方からの意見を聞いたことで、今まで、失敗を恐れる気持ちに勝てな

かった自分の心の弱さに改めて気づいた。

その後の各班ごとの企業大学訪問。私たちの班は東京都足立区にある社会医療法人慈生会等潤病院へ見学に行った。私がまだ小さかった頃、私はよく、喘息などの病気にかかり、両親に迷惑をかけた。その中で、私の病気を治し、両親を安心させてくれたのは、「医者」という存在だった。「医者」という仕事についてよく知りたい。そう思った私は今回の訪問先を病院に決めた。

「等潤病院」では、院長の伊藤雅史先生が病院内の様々な施設を案内しながら、一つ一つ丁寧な説明を私たちにしてくださった。この病院では、最先端のデジタル技術が多くの場面で取り入れられており、診療所や支援センターなどとの連携を強化するため、「電子カルテ」を導入するなどの取り組みをしている。そうした最先端の技術を見学させていただいた中で、一番私の心に残っているのは、X線(レントゲン)撮影などを担当する「診療放射線技師」の技術である。この診療放射線技師の仕事としては、一般的なX線撮影のほか、X線CT装置やMRI装置などの機器を使用した検査、放射線の医薬品を用いて行う核医学検査、放射線治療がある。最初、私たちは一般的なX線検査についての説明を受けた。この検査では、全身が撮影対象部位となり、造影剤や医薬品などを使わない。私たちが普段、病院で受けるX線検査がこの検査に当たる。次にMRI検査について説明を受けた。MRIとはmagnetic resonance imagingの略で「磁気」を使う。人間の体に含まれる水分の水素原子核からなる微弱な磁気に電磁波を当てて検査する。この病院では、現在主流の1・5ステラ装置よりも分解能の高い、3ステラ装置を備えている。次にCT検査について説明を受けた。CTとはcomputed tomographyの略で、X線を用いて体の断面を撮影する。この検査では、様々な部位の病巣を見つけることができ、特に心臓、肺などの胸部や肝臓、腎臓などの腹部の描出能に優れている。この病院には、世界最新鋭の「320列エリアディテクタCTスキャナシステム」が導入されており、16cmの範囲を0.35秒のスキャンで撮影することができる。最後に説明を受けた、血管撮影検査。この検査ではX線に写る薬剤、造影剤を利用して、血管の形態、血流状態を連続的に撮影する。体の中に潜む病気をいち早く発見・治療するために最先端の技術が駆使されていることを私は知った。

「どんなときでも私たちには、患者を助ける責任がある。」「患者さんが良くなっていく姿を見ることが医者という仕事をしてきて、一番嬉しいことだ。」そう話してくださった先生。「医者」という仕事の大変さと喜びを知ることができた。

今回の東大見学会を通して、私はたくさんのことを学んだ。二日間という短い時間ではあったが、得られたものはとても大きかったように思う。「自分の進路決定の材料」として、学んだことをしっかりと生かし、自分なりの「夢・目標」を持てるように努力していきたいと思った。最後になりますが、私たちの「東大見学会」を支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。